

関口定一さんとの交流

——全米私立学校協会（NACS）研究をめぐって——

木 下 順

1

私は半世紀近く研究者渡世を続けてきた。馬齢を重ねた私が、登龍門ともいうべきポスターセッションに応募したのには、ふたつの理由がある。

第一に、今から30年あまり前、1988年の秋に東北大学で開かれた経営史学会で報告した内容を、今頃になって再び取り上げようとしていること。

学会報告は活字にすべきだし、とくに若い人びとにはそうするよう強く勧めるが、私かというと、『経営史学』に発表することをせず、資料や報告レジュメを遺したまま、早や30年が過ぎてしまった。

その意味で、これは本来ならば自由論題で報告すべき内容である。しかし、この職業の仁義として、いちど報告した内容を（別の学会であるとはいえ）もう一度報告するのはご法度である。ポスターセッションという場を選んだのは、そのためである。

第二の理由はシューカツである。

ポスターセッションという形式は、多くの場合、これからシューカツ（就職活動）をする大学院生や若手研究者が選択するものだ。ここでの報告が回りまわって就職に繋がることもある。けれども、私の場合は、研究を「閉じる」という意味でのシューカツ（終焉活動）なのである。よんどころない事情が出来して学者生命が断たれることも意識しながらの、シューカツ（終活）である。

2

こんな奇妙な「報告」を思いついたのは、昨年8月に関口定一さんをとつぜん

喪ったからである。

関口さんとは、30余年にわたる付き合いだった。その春秋を語り尽したい気持ちがあるが、ここはその場ではない。

「そうか、もう君はいないのか」とは、伴侶を亡くした城山三郎さんの作品¹⁾のタイトルであるが、関口さんが私の研究人生の良き「伴侶」であったことを、喪ってから強く感じた。

突然の訃報を聞いたあと、中央大学で関口さんの同僚であった久保文克さんをはじめ、何人かの友人から慇懃されて、まず関口さんの業績リストを作成し、そのあと（友人たちのよんどころない事情によって）業績のサーヴェイを任された。その仕事をしたのが、2020年の4月から5月にかけてのこと。40年近くにわたって積み重ねられた膨大な量の論文を読み進めながら、これまで気づけなかった、いろいろなことに気づかされた。そして、それから半年のあいだに、そのときの思いが次第に熟成されてきたように感じられる。それを文章にしたのが、この報告である。

ここで関口さんの研究世界を概観するならば、私からみて、およそ40年の研究生活をつうじて、おもに3つの分野で活躍されたようにみえる。それは(1)アメリカ労使関係史、(2)歴史をふまえた現状分析、(3)ゼネラル・エレクトリック社（以下GEと略称）研究の3つである。そして、それぞれの分野で活躍され論文を書いて行かれるなかで、多くの研究者たちとネットワークを織り上げられた。研究を組織するのに長けた方だったという評判を聞いたし、私もそう思う。

私はとくに(3)の分野で関口さんにお付き合いいただいた。

そのなかで、榎一江さんと小野塚知二さんを編著者として、『労務管理の生成と終焉』という本が2014年に出版され、私が第1章と第7章、関口さんが第4章を書いた。これは共同研究の成果であるが、この研究会と、谷口明丈さんが編集された『現場主義の国際比較』（2015年）に結実したもうひとつの研究会で、最も深く交流した。

前置きが長くなった。本稿の内容は、関口さんの全米社立学校協会（以下NACSと略称）研究を振り返りながら、私のNACS研究との異同を整理しようとするも

1) 城山（2008）。

のである。

3

われわれの共通の友人が、ふたりは「戦友」であるといったそうである。おそらく労働研究からアメリカ史に向かい、また企業内教育という同じ分野を研究対象としていたからだろう。ふたりをよく知る人物からは、そう見えたのかもしれない。だが私はそれを聞いて、どこか座りの悪さを感じた。

違和感の原因について考え続けて、私はいま、戦友というよりは「双子」ではないか、と思うようになった。こんなことをいうと関口さんに苦笑いされてしまいそうであるが、それはこういう意味だ。

関口さんも私も、生まれは同じ1951（昭和26）年——たったの2カ月違い。そして大学院で同じ対象を、すなわち20世紀はじめにアメリカ大企業で本格化した企業内教育を研究しており、しかもその最初の成果を発表したのも同じ年だった²⁾。生地は関東と関西、大学院は中央大学と大阪市立大学。交流の生まれようがない。それなのに生年を同じくし、また期せずして研究の原点も同時期に共有した。双子、と试试看したのである。ただし、本稿が明らかにするように、双子だとしても、われわれは二卵性双生児である。

それについて述べる前に、共通の研究テーマであるNACSについて簡単に説明しておこう。20世紀初頭の時点でみると、アメリカの大企業が、技術者教育、販売員教育、移民教育（アメリカナイゼーション）などのコースを、自ら運営しはじめていた。大学院時代の関口さんも私も、さまざまな企業内教育のなかで、とくに熟練労働者を教育・訓練するNew Apprenticeship（新徒弟制）に注目した。そしてそれを積極的に推進した団体こそがNACSなのである。

NACSは、先ほど述べた企業内教育のさまざまなコースの推進を目的とした団体で、会員は法人企業だった。そして、日本風にいえば教育・訓練担当の課長や部長が、自社の経験について報告したり、意見を交換しあったりしながら、企業を横断したネットワークをつくった。つまり、大企業の管理者たちが集う、専門家（プロ

2) 関口（1978）、木下（1978）。

フェッショナル) 団体であった。

大会は1913年に創立大会(1月)と第1回大会(9月)が開かれ、その後1921年まで毎年(5月か6月)欠かさず大会を開いた。この団体は翌1922年に労使関係協会(Industrial Relations Association)と合併して全国人事協会(National Personnel Association)となり、さらに翌1923年にアメリカ経営者協会(American Management Association)となる。つまり企業経営の原点に位置する団体だといえることができる。

NACSの年次大会議事録は、いくつもの巨大企業が高額の会費を負担したからだろうか、ほぼ毎回千ページ近くにのぼる。

私は1988年の経営史学会で、これを分析して報告をした。

NACSから人事管理成立に至る経路は、『労務管理の生成と終焉』の関口論文「工場徒弟制から「人事管理」へ」(第4章)で述べられている³⁾。この簡潔な記述は、これから「NACSから人事管理への道」について考察しようとする研究者にとって、出発点となるだろう。

そのなかで関口さんは、NACSの活動を全面的には取り上げていない。それは、冒頭で述べたように、私に遺された課題である。

この課題を果たすためには、私の研究世界を関口さんの研究世界に接続しなければならない。それが、関口さんの私に遺した宿題であると受け止めている。

この点を念頭に置きながら、次に私のアメリカ研究の歩みを語り、そのうえで関口さんの歩みと比較し、ふたりの違い——一卵性ではなく「二卵性」である所以——を語ることにしたい。

4

今年の4月から5月にかけて関口論文を読み続けるうち、今更ながら気がついたことがある。それは、1980年前後つまり30歳前後に、関口さんも私も、アメリカ鉄鋼業の研究を手掛けていたことである。関口さんはこれを論文にまとめられた⁴⁾。

3) 関口(2014)165-171頁。

4) 関口(1982)。

他方、私のほうは1985年の夏に出張して、文書館（ペイカー図書館とハグリー図書館）を訪れて史料調査をおこなったのであるが、結局、鉄鋼大手については一次史料が利用できないことが明らかになった。その代わり、ハグリーに一週間ちかく滞在するうち、①のちに『雇用官僚制』として翻訳された本⁵⁾のもとになったジャコビーの博士論文を見つけて、これを精読することができ、また②鉄鋼業からNACSへと研究対象を切り替えることができた。帰国後、大原社会問題研究所の協定会文庫に所蔵されていた年次大会報告をコピーしてもらって読み、先の経営史学会報告に漕ぎ付けたわけである。

ところで、ここでもふたりの行動は対照的である。関口さんの仕事は実証研究の成果をひとつひとつ着実に論文にまとめるというものである。それに対して私は論文にまとめず、資料とノートと草稿が次々と棚やキャビネットの肥やしになり……といった始末である。とりわけNACS研究を活字にしなかったことを強く悔やんでいる。

さてこの当時、つまり1980年代後半には、労使関係論ではコーハン⁶⁾らの研究が日本に紹介され、制度派労働研究が活性化していった⁷⁾。関口さんはこの研究潮流から多くのことを学んだようである。それに対して私は、労働者の主体性について考え続けるうち、アメリカ歴史学における新労働史（new labor history）の研究潮流に掉さし、方法的模索を続けた⁸⁾。ここから関口さんと私との研究の道筋がさらに離れたのだらうと思われる。

5

このことは、海外留学の行き先によくあらわれている。ふたりともアメリカを研究対象としているから、現地に行って一次史料を集めることが基本的な作業になるので、留学先が重要になるわけである。

関口さんは2003年から1年間、コーネル大学の労使関係研究院（New York State

5) Jacoby (1985).

6) Kochan (1986).

7) 佐口 (2018)。

8) 木下 (1985-1988)。

School of Industrial and Labor Relations) に留学された⁹⁾。ここは制度派労働研究の拠点であるとともに、アメリカの労使関係についての、パンフレット類を含む、歴大な特殊コレクションを蔵している。

関口さんは、大学のあるニューヨーク州イサカから車で片道1時間のところにあるGEを実証研究の対象に定めた。現在は同市の歴史博物館に移っているが、当時は広大な工場のなかに膨大な資料——写真だけでも百万枚¹⁰⁾——が収蔵されていた。関口さんはここで一次史料の山に取り組み、考察を重ねて、次々と論文を発表してゆく。

それに対して私は、イェール大学の歴史学部におられた、新労働史の泰斗・モンゴメリー教授の門を敲いた。19・20世紀アメリカ史の基本文献を大学院生に交じって学ぶとともに、機械工業を中心とした職業教育についての一次資料を収集することから、現地での研究を開始した。

6

すでに述べたように、NACSは1913年からおよそ1920年まで活動していた。われわれは、駆け出しの研究者として1970年代後半に同じ研究対象から出発したけれども、このように、1990年頃になるとかなり異なる研究対象とアプローチを選択するようになっていた。

その淵源をたどれば、出発点というべき大学院での学びに行き着く。関口さんは、中央大学の商学部で長谷川博先生らに学び、批判的経営学の立場から人事管理の生成について考えはじめたと思われる。企業内教育は、雇用管理や賃金管理や労使関係管理などとならぶ、人事管理の水脈のひとつであるので、関口さんはここから出発したのだろう。それに対して私は、大阪市立大学の経済学部で竹中恵美子先生らに労働問題研究(労働経済論)を学ぶうち、19世紀イギリスの労働組合が徒弟制度をコントロールしていたことに修士課程で興味をもち、博士課程に進むと、現

9) 次の留学(2003-2004年)も同じ研究機関だった。そしてあともう1回、オーストリアのメルボルン大学(2011年)に2カ月間留学されている。

10) この写真コレクションについては、デイヴッド・ナイが研究書を上梓している[Nye(1985)]。

在も企業が徒弟制度を運営している理由を知りたく思っ、対象をアメリカへと転換するとともに、経営史を学びはじめた。こうして関口さんとの研究交流がはじまったのである。

このように、大学院時代から同じテーマに取り組んでいたとはいえ、そこに至る過程が異なっていた。それが、さらに研究を深めるうちに、大きな差異を生み出したと考えられる。

この差異はタイムスパン——研究の対象とする時期——を展開する方向に端的にあらわれている。

関口さんは1910年代を起点として、20年代、30年代、そして戦後へと研究を広げていった。その背景には——最初に3つの研究分野として整理したなかの——アメリカ労使関係史についての共同研究がある。これは、大学で人事労務管理を教えており、アメリカ労使関係を研究対象としている方々と一緒に、おこなわれたものである。共同研究の成果として1998年に『アメリカ大企業と労働者』¹¹⁾、2009年には『ニューディール労働政策と従業員代表制』¹²⁾が刊行された。関口さんは独自の実証論文を執筆するとともに、前者において「終章」を、後者においては「序章」と「終章」を担当されている。そして2017年には『現代アメリカ経済史』¹³⁾において「壊れゆく関係」という章を分担された。これら3本の論文を合わせると、1910年代以降のアメリカ労使関係が概観できる。その意味で、3冊の書物に分割された、1冊分の通史を書かれたともいえる。

要するに、共同研究のなかで、1920年代（＝ウェルフェア・キャピタリズム）、1930年代（＝ニューディール体制の成立）、そしてニューディール体制の「崩壊」と、アメリカ労使関係史を時期を追ってほぼ10年ごとにまとめるという仕事を担当されるなかで、関口さんは実証研究の対象を第一次世界大戦から現在へと展開していったのではないだろうか。

これに対して私は、ウースター郡の機械工業を対象として選びつつ、19世紀に遡り、さらに植民地期についての研究書まで読むようになった。それは、ウースター

11) 平尾（1998）。

12) 伊藤（2009）。

13) 谷口（2017）。

とフィッチバーグの製造業者たちがメカニック (mechanic) という人間像を労働者たちに示しながら、職業教育を推進したからである。「メカニックとは何だろうか?」——この問いに導かれて、19世紀、さらには18世紀ニューイングランドの労働者世界、いや社会そのものに、分け入ることになった。

7

少し長くなるが、あとの議論に関わる限りで、拙著『アメリカ技能養成と労資関係——メカニックからマンパワーへ』¹⁴⁾の内容を紹介したい。

この本はマサチューセッツ州のウースターという、19世紀後半に代表的な機械工業都市として興隆した町をおもな対象として、徒弟制と資本賃労働関係の発展との関係を考察したものである。

ここでいうメカニック (mechanic) とは、大塚久雄のいうヨーマン (yeoman, 独立自営農民・職人) に相当する。彼らは農民としてニューイングランドに入植したが、植民地経済の発展とともに半農半工の生活——単純化すれば夏は農夫、冬は職人——を送る者が続出し、産業革命とともに多くが都市に移住してフルタイムの職人となる。大塚の描く世界がイギリスで妥当するかどうかは今日も歴史学において論点であるとしても、ニューイングランドではたしかに、おもにイーストアングリア (イングランド東部) から移住した人びとの間に、ヨーマンの世界が展開していった。そのような歴史的現実があったことを、私は19世紀前半の資料から読み取った。

とはいえ実証の中心は、このメカニックが、製造業者すなわちブルジョアジーと、熟練労働者すなわちプロレタリアートとに、階層分解する歴史過程である。ニューイングランドでは19世紀半ばにメカニックの階級分解が生じた。そのなかでブルジョアジー、とりわけ製造業者の2代目・3代目は、自らメカニックではない場合でも「メカニック」を自称し、製造業者を頂点とする企業内秩序そして都市文化の秩序を形成した。すなわち、徒弟修業を終えて一人前の職人となり、勤勉と節約によって独立資金を蓄積して小工場の親方となり、さらにひとかどの工場主に出世

14) 木下 (2000)。

するという、アメリカン・ドリームの物語を、労働者たちに信じ込ませようとしたのである¹⁵⁾。

ホレイショ・アルジャーの『ぼろ着のディック』¹⁶⁾をはじめとする文学作品やリンカーン大統領をはじめとする多くの人びとの人生に裏付けられたアメリカン・ドリームは、メカニックや農民など多くの人びとの心をつかんだ。だが、さすがに19世紀の末ともなると、そんな話は賃労働者にとって現実味が薄れ、出世物語はむしろブルジョアジーの階級形成の道具として役立つこととなった。そんなところに、IAM（機械工国際組合）のオルガナイザーがニューイングランド各地の工業都市に乗り込んで果敢に働きかけたので、ストライキが起り、組織化も進展した。その背後には、モンゴメリーがいうように、自律的な熟練労働者（autonomous craftsmen）がなお独立性を保っている、生産現場の現実があった¹⁷⁾。

IAMのオルグ（副委員長）はまるでビジネスマンのように、毎月発行される機関紙に、どの町でどのような組織化活動を展開したかを、詳細に報告している。ニューイングランド担当オルグの月次報告を読むと、20世紀初頭、とりわけプロヴィデンス、ウースター、フィッチバーグ、そしてリンにおいて、組織化運動とオープンショップ運動（＝使用者による組合員排斥）との対立が激しかったことがわかる。

労使対抗が激しくなるなか、機械工業都市の使用者は、高い技術を身につけるだけでなく、IAMオルグからの「悪影響」を受けない、「independent」な熟練労働者の養成を、職業教育として展開しようとした。オープンショップ団体の支部が全米の機械工業都市に次々と結成された。その動きの全国的な中心のひとつがウースターであり、フィッチバーグだったのである。これはおよそ1900年から1915年にかけてのことであったが、その推進者たちは、同じくマサチューセッツ州のリンにあったGEの企業内教育担当者たちと連帯した。こうしてオープンショップ使用者者のネットワークが、マサチューセッツ州の職業教育をめぐって展開したのである。私はこれを「オープンショップ教育」と名づけた。

15) 木下（2015b）。

16) Alger (1868).

17) Montgomery (1980).

だが、オープンショップ教育は次々と挫折していった。職業教育をめぐる運動が展開するなかで、AFL（アメリカ労働総同盟）の指導部を含む、リベラル派がいちおう勝利した¹⁸⁾。そのなかで組合を排除したオープンショップ教育にこだわったのは、リン工場における新徒弟制だった。

8

以上のことを念頭に置きつつ、いよいよ「二卵性双生児」の説明に入ろう。

同じく機械工業を取り上げ、また同じくNACSから出発したとはいえ、これまで述べてきたように、関口さんと私とは、取り組む姿勢に明らかな違いがあった。そこから、以下のような違いが生まれた。

(1) すでに述べたように、関口さんが1910年代から現在にかけて研究世界を切り拓いてこられたのに対し、私は逆に1910年代から19世紀、そして18世紀へと、時代を遡った。

その結果、関口さんは1910年代に固まりはじめた熟練労働者と経営者との関係を前提にしなが、議論を展開していった。それに対して私は、およそ1880年代から1910年代半ばにかけての労使対抗の時代を、(18世紀からはじまる)研究の到達点とした。20世紀初頭を出発点として、私は過去へ、関口さんは未来へと、タイムトラベルしたわけである。

激しい労使紛争を取り上げる場合と、労使関係が制度化されてゆく場合とでは、立論の枠組が違ってくるはずである。それは日本史でいえば、武力をともなう「万人の万人に対する闘争」が広く展開された戦国史と、元和偃武以降の撫育・民政を追求する徳川の天下とを、いかに繋ぐか、という難問に似ている。両者を通史的に理解するには、双方の研究者が、実証と議論を重ねながら、総合的な枠組みを作ってゆかねばならないだろう。

私の労使関係像と関口さんの労使関係像とを接合する場合にも、これと同じような困難が待ち受けていると思われる。

18) 労働組合が制度的に熟練労働者の養成に参加できるようになるのは、ニューディール期に全国徒弟制度法が制定され、労使合同徒弟制度訓練委員会が発足してからのことである [平沼 (2007)]。

(2) 以上の論点を方法論の面で語ると、関口さんはリチャード・イーラーやジョン・コモンズ以来の制度派経済学の発展としての制度派労働研究を基盤にしていたように思う。この流れはもっぱら、労働組合に組織されている労働者を取り扱う。それに対して私は、未組織労働者のあり方や、組織労働者であっても指導部に公認されない山猫ストやサボタージュや労働者管理などに注目する、新労働史の流れを汲んでいる。

方法論としては、このような違いがあった。その違いを意識しながら、実証と理論のすり合わせをする必要があった。

(3) 次に、「7」で紹介した拙著を踏まえると、同じGEでも対象とする工場が違う。

いうまでもなくGEはいくつもの工場¹⁹⁾をもつ巨大企業である。そのなかで関口さんはGEのスケネクタディ工場をもっぱら研究し、私はリン工場を研究した。

自動車産業でいうと、ゼネラルモーターズ社(GM)の成り立ちに似ている。GMがシボレー、ブイックなどの合併によって発展したのと同じように、GEも合併・吸収によって巨大化した。スケネクタディ事業所の前身はエディソン社であり、リン事業所の前身はトムソン・ヒューストン社だった。両社は企業文化を異にし、経営幹部たちの書簡を読むと、少なくとも当初は水と油のように交わらなかったようである。

さて、「7」で述べたように、リンは積極的なオルグ活動の対象となった。リン工場の幹部はこれにオープンショップで対抗し、その手段として新徒弟制を発足させた。

これに対してスケネクタディ工場では組合活動が容認された。それどころか1910年代、このGE城下町において、1910年頃には社会主義者が市長に選ばれていた。関口さんはそのような工場の労使関係を研究したわけである。

この点でも、実証にもとづいた議論が必要だった。

以上の3点について、私自身が2000年代から日本近代史²⁰⁾に研究の軸足を移しつ

19) 原文は works であるが、関口さんは事業場と訳し、私は製作所と訳してきた。ここでは平易な表現として「工場」と訳しておく。

20) この仕事は最終的に『井上友一と留岡幸助—内務省地方局の研究(仮題)』

つあったこともあって、議論をする機会が多くあったし、親しく酒を酌み交わす機会も多かったのに、積極的な対話をおこなわなかった。互いの研究を摺り合わせる努力をしておれば、これらの差異に橋を架けることができたかもしれない。後悔先に立たず、である。

(4) さらにもうひとつ、ふたりの違いについて付け加えておきたい。それは、私がかつて工場労働者だけをみてきたのに対して、関口さんはホワイトカラーをふくむ全従業員へと、視野を広げていったことである。

その志はすでに2000年頃にはもっておられたように見える。関口さんは驚くほど精力的に研究を進め、1冊の本になりうる質と量の論文を続々と世に問われた。

おそらく、もうあとせめて10年でも長生きしてくれていれば、われわれはブルーカラーとホワイトカラーとを総合し、しかも日本の労働研究への豊かな示唆をふくむ、GEについての部厚い歴史書を手にすることができたことだろう。

9

関口さんの研究は、アメリカにもっていっても通用する。とはいえ言葉の壁は如何ともし難い。最後にこの点について思うところを述べたい。

アメリカ人事管理成立史という分野は、本国アメリカにおいて、ジャコビーをはじめとする優れた実証研究の流れが、2000年頃には途切れてしまった。経営史にしても歴史学にしても、学界の研究関心が他の分野に移ってしまったのである。

それに対して日本では、1950年頃に生まれた、労使関係、人事管理、経営史などを大学院で専攻する人びとが、1980年当時の「日本的経営」礼賛論に強い違和感を感じつつ、労働者のあり方を根底に据えて、アメリカ人事管理史を研究しはじめていた。いうなれば History of Personnel Management from Bottom Up である。関口さんも私もこの立場から研究を続けた。

海外に渡航するのが経済的に容易になり、留学や科学研究費などを利用して、積極的に史料調査に出かけることができたのは幸いであった。こうして、研究の勢い

という書物にまとめる予定である。とりあえず拙稿を参照していただければ幸いである [木下 (1997), 木下 (2015a), 木下 (2016)]。

が衰えたアメリカ人事管理史を日本人研究者が精力的に開拓するという、奇妙な現象が生じた。

とはいえ、日本語で発表するかぎり、世界からは相手にされない。

たとえばインドを例にとれば、イギリスの植民地となったことはいうまでもなく筆舌に尽くしがたいほどの不幸であるが、皮肉なことに、研究発表の言語が英語になってしまったために、研究を発表すればそれがグローバルな業績として認知される。

これとは対照的に日本は、幸いにも19世紀半ばに植民地主義の毒牙を逃れ、先人の努力によって20世紀初頭には日本語で高度な研究のできる教育・研究環境が整えられた。ところが、その意図せざる結果として、とりわけ人文・社会科学において、日本語で優れた研究が発表されても国内でしか読まれない²¹⁾。

アメリカ人事管理成立・発展史についていえば、グローバルな水準を達成している、あるいは近づいている研究者が、私のみるところ、関口さんを含めて日本に数人いる。けれども日本語で成果を発表しているかぎり、日本語の読める研究者を除き、外国では知られることがない。

まとめよう。とりわけ人事管理史研究者は、1980年代を頂点とする「日本の経営」の現実のなかで苦闘しながら研究を蓄積し、関口さんをはじめとして本国アメリカでも通用する優れた研究成果を残してきた。ところが、言語の壁を突破しなければ、研究成果が世界に認められない。しかも他方で、本国アメリカにおいては、ジャコビーらが多くの研究者が切り拓いた人事管理成立史研究は、学者たちの研究関心の推移によってほぼ1990年代に衰退してしまった。その意味で、日本人研究者がおこなうべき、また発信すべき仕事は、まだ多く残っている。

その意味でも、関口さんが亡くなられたことは残念である。生きておられたならば、著書の英語版というかたちで、世界に貢献することも不可能ではなかったのである。

21) 文学者も、優秀な翻訳者に恵まれれば川端康成のように、また村上春樹のように、ノーベル賞級だと持て囃されるが、そうでない場合は「ガラパゴス作家」とどまる。この問題について最も深く考え抜いたのは、英語にもフランス語にも堪能な、水村美苗であろう [水村 (2008)]。

以上、関口さんの仕事に関連して是非とも書いておかねばならぬと考えながら、いつの間にか大風呂敷を広げてしまった。最後に、自分に託された「宿題」というかたちで本稿をしめくりたい。

遺された私がおこなうべきことは、NACSの議事録をもう一度通読し、関連文献も読み直しつつ、1988年の経営史学会報告を論文にすることである。そして、それを最後の章として組み入れ、『アメリカ技能養成と労資関係』を増補改訂することである。言い換えれば、それは労使対抗の激しかった1900年前後の機械工業から、人事管理システムが整備され労使関係制度が展開しはじめる1920年頃までの推移を、実証的に明らかにする仕事になるだろう。

* * *

もし、関口さんが生きておられるとして、こんな話をしたとしたら、さぞ喜ばれたに違いない。また、あちらに行ってしまった関口さんにこのような話をする機会があったとしたら、あの人懐っこい顔で、きついお灸をすえられるのではないだろうか——「いつまでも生きてると思うなよ！」

図らずも関口さんの研究人生を回顧する機会を与えられ、その作業を進めるうち、自らのそれと重ねつつ、思うところが多々あった。本稿はそれを書き綴ったものである。

謹んでご冥福をお祈りする。

付記 本稿は2020年10月24日に開かれた政治経済学・経済史学会大会（ZOOMにて開催）のポスターセッションで報告した内容にもとづいている。コメントをくださった皆さんにお礼を申し上げる。

参考文献

- 伊藤健市（2009）伊藤健市・関口定一編著『ニューディール労働政策と従業員代表制—現代アメリカ労使関係の歴史的的前提』（ミネルヴァ書房）
- 木下順（1978）「イギリス機械工業における技能養成と労使関係—1920年から1950

- 年まで』『経済学雑誌』第78巻第1号
- （1985-1988）「アメリカ合衆国労資関係史研究の諸潮流」(1)『国学院経済学』第33巻第4号(2)第34巻第1号;(3)第34巻第3・4号;(4)第35巻第3・4号;(5)第36巻第1号
- （1997）「協調会の労務者講習会—アメリカ合衆国との比較」『大原社会問題研究所雑誌』458号
- （2000）『アメリカ技能養成と労資関係—メカニックからマンパワーへ』ミネルヴァ書房
- （2014）「会社徒弟制のトランスナショナル・ヒストリー—ゼネラル・エレクトリック社リン事業所からトヨタ自動車へ，1903～70年」，榎一江・小野塚知二編著『労務管理の生成と終焉』ミネルヴァ書房，第7章
- （2015a）「もうひとりの井上友一—救済局の夢」『経済学雑誌』第115巻第3号
- （2015b）「立身出世の夢と現実—自由労働から科学的管理へ」，谷口明丈編著『現場主義の国際比較—英独米日におけるエンジニアの形成』ミネルヴァ書房，第4章
- （2016）「人事労務管理の生成—アメリカと日本」『社会政策』7(3)，2016年
- 佐口和郎（2018）『雇用システム論』有斐閣
- 城山三郎（2008）『そうか，もう君はいないのか』新潮社
- 関口定一（1978）「アメリカにおける企業内養成工制度の形成（1900-1917）—社立養成工学校の成立・発展を中心として」『商学論纂』第20巻第11号
- （1982）「US スチールにおける労務政策の展開（1901-1915）—独占体制下の労資関係」『商学論纂』第24巻第4号
- （2014）「工場徒弟制から「人事管理」へ—生成期ゼネラル・エレクトリック社の組織・管理問題と人材育成を中心に」，榎一江・小野塚知二編著『労務管理の生成と終焉』第4章
- （2015）「「現場経験」を通じた大卒エンジニア育成—GEの「テスト・コース」の場合」，谷口明丈編著『現場主義の国際比較—英独米日におけるエンジニアの形成』ミネルヴァ書房，第5章
- （2017）「壊れゆく関係—「労使関係」の成熟と衰退」，谷口明丈・須藤功編『現代アメリカ経済史』有斐閣，第13章
- 谷口明丈（2017）谷口明丈・須藤功編『現代アメリカ経済史—「問題大国」の出現』有斐閣
- 平尾武久（1998）平尾武久・伊藤健市・関口定一・森川章編著『アメリカ大企業と労働者—1920年代労務管理史研究』北海道大学図書刊行会

- 平沼高 (2007) 「現代アメリカの徒弟制度」, 平沼高他編著『熟練工養成の国際比較—先進工業国における現代の徒弟制度』ミネルヴァ書房, 第1章
- 水村美苗 (2008) 『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』筑摩書房
- Alger, Horatio, Jr. (1868) *Ragged Dick: Or, Street Life in New York with the Boot-Blacks*, 畔柳和代訳『ぼろ着のディック』松柏社, 2006年
- Jacoby, Sanford (1985) *Employing Bureaucracy – Managers, Unions, and the Transformation of Work in American Industry, 1900–1945* (New York: Columbia University Press) 荒又重雄, 木下順, 平尾武久, 森杲訳『雇用官僚制—アメリカの内部労働市場と“良い仕事”の生成』(北海道大学, 1989年; 増補改訂版, 2005年)
- Kochan, Thomas A. (1986) Harry C. Katz, Robert B. McKersie, *The Transformation of American Industrial Relations* (New York: Basic Books)
- Montgomery, David (1980) *Workers' Control in America: Studies in the History of Work, Technology, and Labor Struggles* (Cambridge, U.K.: Cambridge University Press)
- Nye, David E. (1985) *Image Worlds: Corporate Identities at General Electric* (MIT Press) 山地秀俊・山地有喜子訳『写真イメージの世界—ゼネラル・エレクトリック社のコーポレート・アイデンティティ, 1890年から1930年まで』(九州大学出版会, 1997年)